

築土構木の軌跡！

—地域に夢を刻んだCVV(シビル・ペテランズ&ボランティーズ)—

松井 保氏 (大阪大学 名誉教授)

■地盤工学とともに45年

「世の中のため」を目指して土木工学を専攻した。大学卒業時には、既成のフレームが十分定まっておらず、今後発展・拡大する分野として、地盤工学(当時は土質工学)を専門分野に選んだ。以来、地盤工学に関する研究やプロジェクトにかかわって45年になる。

その間に、土や地盤から学んだことが数多くある。たとえば、不動の地盤といわれるが、一方では液化化や側方流動のように液體的な挙動を示す。このように土は非常に複雑な材料であるので、広い視野とフレキシブルな考え方で対応しないと、なかなかその本質には迫れない。複雑な世の中での対応の仕方と相通するものがある。

また、土質力学の教科書では、章ごとに土のモデル化が異なり、一見一貫性がない。いわば縦割りで構成されており、それらをつなぐ横系的な研究が非常に重要になる。日本のような縦

割り社会では、災害時や社会構造変革期のような非常時には、横系が非常に重要になることと軌を一にしている点が興味深い。

研究テーマについては、人のあまりやらない、時代を先取りするようなテーマに数多く取り組んできた。チャレンジ精神と創造性をモットーに、総合技術としての地盤工学を目指した45年間だった。チャレンジ精神については普段でも心がけてきた。

■技術にインセンティブを

建設産業界では、技術特許がほとんど有効に機能せず、技術開発に要した投資が回収できない

トする企業が増えている中、技術にかんがりのインセンティブを与え、産業構造へのパラダイムチェンジは不可欠であろう。この点については、現在、総合評価方式の中で試行されつつあり、大いに期待している。

■優秀な技術者の人材確保

一般に、工学の一分野において、新卒の22歳から定年の60歳までの約40年の技術者が現役であると考えて、その間に優秀な技術者世代のピークがあると、その工学分野は大いに栄えて安泰であると言われる。最近の約40年間の建設産業界では、団塊の世代がそのピークの役割を果たし、その発展に大いに寄

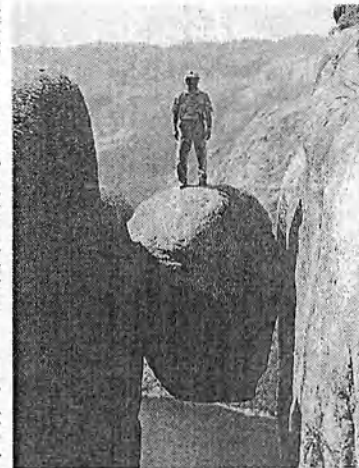
チャレンジ精神と創造性で地盤工学追求

いケースがあまりにも多すぎること。そのような産業界は、若い技術者にはあまり魅力があるとはいえず、また外国での競争力もなかなか身に付かないと思われる。現在、優秀な若い技術者の人材確保は喫緊の課題であり、海外での仕事の確保にシフ

与した。しかし、ここ数年もたないうちに、このピークが現役から去るようになっていく。建設産業界では、次世代を担う優秀な技術者世代の新しいピークを必要としており、早急な対応が求められる。

■若い世代への継承

建設産業の高度成長期を支えた多種多様な技術の多くは、団塊の世代を含む50歳前後から上のシニア世代に蓄積されている。このような世界に誇れる土木技術を30歳代より若い世代に



還暦を記念しノルウェーにある空中たまご岩へ登頂

■今後の活動

継承することは、非常に重要な課題であろう。しかし、この技術継承の現状はスムーズに行われている状況にはない。その最大の理由はジェネレーションギャップであろう。すなわち、「一生懸命頑張って優秀な技術力を身につければ、将来は社会に大いに貢献できると信じて努力した世代」と「現状に満足し、あまり頑張らずにスマートに活用しようとするものである。

に楽しく過ごすように考えている世代」の間のギャップである。その結果、若い世代の技術者は、技術の本質を理解しようとするに、マニュアルに基づいてすべてを処理しがちになる。しかし、その底流にある技術的常識が不十分なまま単純にマニュアルを用いると、大失敗につながるケースが考えられる。このような状況を避けるために、シニア世代から若い世代への技術継承は喫緊の課題であり、そのための創意工夫が求められる。

なお、CVVの詳細は、http://cvv2.sakura.ne.jp/cvv2/を参照されたい。

社 土木学会関西支部創立80周年



(まつい たもつ)63年大阪大学工学部建築工学科卒、大阪大学工学部助手、講師、助教を経て、84年教授。84年カーパークレイア大学員研究員、04年退任。現在、大阪大学名誉教授。大阪府出身。CVV代表。67歳。

技術の伝承で重要な横系的活動